

熊本県立宇土高等学校 令和4年度（2022年度）学校評価表

**1 学校教育目標**  
 熊本県教育委員会の「令和4年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「令和4年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、全職員が教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。さらに、本校建学の精神である「質実剛健」のもと百年を超える伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。  
 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

- 2 本年度の目標**
- (1) 生徒指導（自ら考え自ら行動する生徒の育成）
  - (2) 学習指導（『担当者の顔の見える授業』『感動を与える授業』の実践と自学力の育成）
  - (3) 進路指導（キャリア教育を基盤とした一人ひとりの進路の夢を実現させる進路指導）
  - (4) 豊かな人間性と人権感覚を備えた生徒の育成
  - (5) 社会に貢献し、未来を切り拓く力を持った生徒の育成
  - (6) 中高6年間一貫教育（魅力ある教育課程の研究と実践）
  - (7) スーパーサイエンスハイスクールの推進
  - (8) 開かれた学校づくり

**3 自己評価総括表**

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	開かれた学校づくり	①小中学校等訪問 ②PTA・同窓会との意見交換 ③広報活動	①近隣校延べ100校以上 ②延べ20回以上 ③学校案内名刺5000枚配布	・年2回の公開授業の実施 ・学校運営協議会の開催 ・PTA役員会、保護者会 ・学校HP、インスタグラム、ブログの更新頻度の向上	A	近隣の小中学校を中心に校長をはじめ多くの職員で延べ200校以上訪問した。また、近隣の高校と協力し、各校の特色を紹介するチラシを近隣の中学生及び小学校5、6年生全員に配付するなど充実した広報活動を行った。今後もより多くの生徒に周知する取組を実践していく。
	学校の魅力化	①入学希望者数 ②学校説明会参加者数	①中学140人、高校200人以上 ②中学150人、高校250人以上	・体験入学及び学校紹介の充実 ・個別最適な学びの学習環境の確立 ・ICTを活用した探究型授業の実践 ・海外進学ガイダンスの実施	A	SSHの成果や一人一台端末を踏まえた個別最適な学びを充実させ、従来の学校説明会に加えLEDビジョンを活用した積極的な情報発信を行った。近隣高校と連携した小中学生の自由研究の一助となる動画の作成及びチラシによる周知も実施した。
	本校独自の中高一貫教育プログラムの開発と実践	生徒の本校での学びに対する満足度	中高一貫の特色を活かした新たな学びの形をめざすための職員研修を年4回実施	・一人一台端末整備を活かした学び直しコンテンツ等の充実 ・SSH申請を見据えた新たな教育課程の編成	B	新学習指導要領に基づいた中高一貫6年間の学びを見据えた授業改善を実践するための職員研修を年間4回、延べ10時間以上実施した。個別最適な学びの充実を目指した各教科の取組を今後も継続していく。
	業務改善・働き方改革	時間外従事時間	前年比10%削減	・ICT活用による業務の効率化 ・部活動指導方針の遵守、顧問の指導時間の分担 ・月1回の定時退勤日の設定 ・8月定時出退勤月間の設定	B	・各種調査、授業での小テスト、採点などでICTを活用し、効率化を図った。 ・部活動での休息日の確保や活動時間の徹底ができた。顧問の指導時間の分担はあまりなされていない。 ・時間外従事時間約10%削減
	教職員の健康増進及び福祉の確保	年休取得12日以上	・学校閉庁日の設定 ・メンタルヘルス職員研修の実施 ・衛生委員会の充実	A	・年休取得12.2日を達成 ・長時間勤務者が固定しており、業務の平準化が課題 ・衛生委員会で毎月職員の健康状態、業務負担状況を確認し、指導・助言や産業医面談を行った。	

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学力向上	授業の充実	全ての生徒が意欲的に参加する授業が実践できているか。	・生徒の理解度及び満足度90%以上の達成 ・生徒U-KI指数45%以上	・個別最適な学び、協働的な学びを踏まえた授業開発 ・授業時数の確保 ・研究授業・職員研修の充実	A	新しい学力観に基づく職員研修を4月、7月、12月に実施し、観点別評価を踏まえた授業改革が進んでいる。見える化のためのシラバスづくりが課題である。
	自学力の向上	課題の質と量は適切か。	・課題の質と量の満足度80%以上 ・目標宅習時間の確保(高1・2年＝週1000分 高3＝週1500分)	・授業と課題の質的改善の推進 ・宅習時間調査の分析と共有	B	授業改革に伴い、課題(宿題)の質も変わりつつあり、全学年で昨年よりも家庭学習時間が増加した。個別最適化の趣旨を踏まえた家庭学習(自学)の質的検討が課題である。
キャリア教育(進路指導)	自己の発見とキャリアの基礎構築	自己の強み発見	自身の個性・強みを考えた目標設定度90%以上	・進路希望調査 ・年3回以上の面談の実施 ・部会等での情報交換	A	11月の時点での進路希望未定者数は3学年合計で20名と全体の3%を切った。個性や強みを伸ばすことが今後の課題である。
		将来を見通したキャリア構想	職業を見据えた進路目標の設定度90%以上	・オープンキャンパスへの参加 ・インターンシップ ・キャリアパスポートの作成 ・卒業生による合格体験談	B	コロナ禍においてもオンライン等を活用することで生徒の活動の場を作ることができた。また、対面やオンラインでの大学説明会も実施した。生徒の職業観育成の一助となった。自ら行動できない生徒への働きかけが課題である。
	一人ひとりの進路目標の達成	個に応じた指導の充実	・総合型選抜の受検者80人以上 ・海外進学希望者5人以上	・進取会の実践、模試の分析、一人一台端末を活用した課題の提示・添削指導の実施 ・進路検討会の充実、業者の研修会・入試分析会参加 ・入試問題研究	B	総合型と推薦型を合わせるとのべ126の出願をした。進路検討会では生徒ひとりひとりの個性や能力・成績をみながら検討したが、今後はより多様化する選抜に備え、昨年度の担当者からの経験の引き継ぎ、指導法の効率化が重要な課題となる。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	服装・あいさつ・時間厳守の徹底	全職員による生徒指導と生徒に寄り添った配慮ある対応の実践度80%以上	・毎朝の登校指導を実施 ・日頃からの整容指導の徹底 ・生活委員会によるあいさつ運動	B	毎朝の登校指導も数名の先生方の協力で実施でき、遅刻回数が多い生徒は担任の先生と話し合いを持ち、指導できた。服装検査は学年中心に指導できた。
		交通ルールの遵守とマナーの向上	交通ルール遵守率80%以上、交通事故等1%以内	・交通安全教室の実施 ・職員、交通委員会の定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作成と掲示	B	全体的には交通ルールの遵守率は80%以上、交通事故1%以内はできているが苦情もある、交通安全教室後は0件と少しずつは交通マナーも良くなっているが、今後も丁寧な指導は必要である。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営 各種委員会活動の活性化	生徒会主催の行事の企画・運営の充実、アンケートによる満足度90%以上 目標の明確化、生徒自ら行動する委員会活動の実践、達成度80%以上	コロナ過の中で開催できる体育祭、クラスマッチ、文化祭の見直しと、より一層の充実 ・生徒会執行部の主体による各種委員会の開催 ・各種委員会の主体的な活動による活性化	A B	コロナ過の中で、体育祭や文化祭ともに生徒会を中心に試行錯誤しながらも見直しが行われて充実した行事ができた。 学校行事における活動は充実しているが、日頃からの委員会活動が継続できてない。
人権教育の推進	命を大切にすることを育む指導	すべての活動をおして人権を大切に、あらゆる差別の解消をめざす生徒の育成	・自他を尊重する意欲や態度の育成 ・他者を共感的に受容するコミュニケーション力の育成	・人権作文・標語等の作成や応募 ・人権LHRや講演会の実施	A	・いじめ防止委員会では目標として掲げていた活動を十分に行うことができた。 ・LHRについては各学年で設定したテーマに沿って実施することができた。
	人権教育の指導方法の改善・充実	学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進と組織的な取組	・学期1回の人権LHRの実施 ・学期1回の職員研修の実施	・全職員による共通理解と実践 ・家庭、地域への啓発	A	1学期、2学期に計画された職員研修では、当初の目標を達成し、研修を行うことができた。

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
特別支援教育	特別な支援を要する生徒への適切な支援と対応	生徒の特性の実態に添った支援	・学期1回の生徒理解研修の実施 ・ケース会議の即時開催	・担任、学年団の連携、協力による支援の推進、及び支援に係る評価、提言へのサポート会議、ケース会議の活用 ・外部の専門機関等の支援、指導により職員の資質対応の向上	A	・サポート会議は関係教科担当者の意識の変革、連携に寄与した。 ・「特別支援、指導計画」の作成、引き継ぎは次のステップに有効である。この認識が進路先にスムーズに引き継ぐ手立てである。担任間にこの認識に差がある。
		ストレスを抱え込む生徒の支援	・「愛の1・2・3運動+1」の実践	・SCとの定期的な面談の設定 ・関係、専門機関との連携	A	心と体の振り返りアンケートでストレス反応の高い生徒に対し、学年団と情報を共有してSCに繋げた。特に、支援を要する生徒に対し、SSWと連携を図ることができた。
いじめの防止等	いじめの問題に向けた生徒と職員との協働	いじめの早期発見	・年2回のアンケート実施 ・スクールサインへの即時対応	・アンケートによる現状把握、情報収集、共通理解 ・いじめ防止委員会の自発的な活動	A	・「心のアンケート」等を予定通りに実施し、いじめに関する事案を発見することができた。 ・スクールサインへの投稿には、その都度対応した。
		いじめ問題に向けた組織的対応	・「いじめが解消された」という回答100%	・情報集約担当者の活用 ・保護者や関係機関との連携	B	情報集約担当者として担任や学年団との連携は概ね良好で、協力しながら問題の解決を図った。
地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	コミュニティ・スクールの活性化	学校運営の改善	・年2回の学校運営協議会を開催	教育課程の編成、学校経営計画、防災体制等、学校全般について協議を行う。	A	学校経営計画、防災体制等、地域への情報発信、働き方改革等貴重なご意見をいただいた。
	地域との連携	地域、小中学校及び高校間の連携	・「学びの部屋」の開催 ・One Team プロジェクトの実施	・小学生学習支援ボランティア ・宇土、松橋、小川工業高校生による小中学生用『自由研究・ものづくり・発明工夫の手引き』の制作・配布	A	・小学生学習支援ボランティア〇人参加、小学生〇人参加 ・『自由研究・ものづくり・発明工夫の手引き』を制作し、管内及び熊本市立の小中学校に配布した。 ・学校周辺の河川の浚渫ボランティアに22人が参加
図書館活動	読書活動の活性化	利用しやすい図書館作り	デジタルツールを活用した図書館からの情報発信(年間30回以上)	・デジタルツールでの情報発信および周知 ・職員向け情報提供 ・読書活動(朝読書含む)に関するアンケート等	A	12月上旬現在で26回のデジタル配信済みであり、今後5回以上の配信を予定している。職員生徒からのリクエストが12月に昨年一年間の件数に達した。予約件数は全年度を上回り、情報発信の一定の効果が見られた。課題は情報閲覧者数の増加である。
			図書委員会活動の充実 ・広報発行月1回 ・展示作成月1回	・広報誌『らいぶらりいたいむず』の定期発行 ・図書館特別展示コーナー(月替)の充実 ・クラスへの周知活動	A	各活動において主体的に生徒達が動く姿が見られた。本校で行われた宇城地区生徒図書委員研修でも他校との交流により刺激を受けその後のモチベーションにつながり、企画運営の力がついた。
SSH	中間評価において、指摘を受けた事項の改善・対応	指導方法及び評価方法の体系化	1年ロジックプログラム、2、3年SS課題研究・GS課題研究の指導方法・体制の充実	・Google共有ドライブによるデジタルポートフォリオ ・ロジックガイドブック第三版発行 ・GS本2022発行	B	成果:生徒の探究活動を支援するデジタルポートフォリオ、SS/GS指導体制の構築 課題:探究に必要な知識・技能を高めるコンテンツ(ロジックガイドブック)の開発と運用
			探究活動を通して身につけさせたい力の評価方法の開発	・ロジックルーブリック ・ロジックチェックリスト ・ロジックアセスメント ・AI Grow活用によるコンピテンシー評価を実施	B	成果:ロジックルーブリックの観点・段階に基づいたポートフォリオ分析により、重点改善事項を抽出。 課題:探究力や生徒の資質・能力の変容の可視化、分析

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
	申請に向けた研究開発の目的・目標の設定、内容・実施方法・検証評価方法の設定	関係機関等との連携	第三期の研究開発を支援する連携機関との関係構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運営指導委員会</li> <li>・大学等連携構築</li> <li>・研究機関との連携構築</li> <li>・KSC等との連携構築</li> </ul>	B	<p>成果:関係機関等の連携を通して第Ⅲ期申請の方向性を定めることができた。</p> <p>課題:一部の生徒だけでなく、より多くの生徒に社会との関わり、外部連携の機会を確保する取組</p>

#### 4 学校関係者評価

- ・宇土中高の様々な取組について「なぜやるのか？」などを発信していけば、周りの理解が増すのではないかと。特に、海外との交流は魅力と感じている。
- ・探究の「問い」を創る授業は、大学の二次対策をはじめ今の入試に適應していると思われる。
- ・参観した授業では、教師の発問に対し、生徒たちが様々な角度からグループで考え取り組んでいた。
- ・生徒たちはタブレットを使いながら授業時間を効果的に活用しており、限られた時間で本当に身につけたい力がつくと感じた。
- ・観点別評価の適正な実施に伴う定期考査のあり方見直しは大変興味深い。
- ・近隣の小中学校との連携や情報共有は重要である。特に、交通指導に関する情報共有やルールの統一などの検討も必要ではないか。

#### 5 総合評価

- ・新しい学習指導要領の導入に伴い、過年度より実施してきた職員研修を更に充実させ、観点別評価の適正な実施及び協働的な学びの充実に向けた取組を進めることができた。
- ・SSH第Ⅲ期申請に向け、第Ⅱ期までの取組であるUTO-LOGICや探究の「問い」を創る取組等を深化させた新たな教育課程を検討し、より充実した教育活動へとつなげている。
- ・宇土市及び宇城市の県立高校と連携し、近隣及び熊本市の小中学校に本校のPRチラシを配付するとともに、公道沿いのLEDビジョンを活用し、半年にわたりPR動画を流し続けた。
- ・遠方から通学する生徒の利便性向上を図るため、バイク通学に関する条件を緩和した。
- ・学校安全に関する取組として防犯カメラの設置を新たに行った。

#### 6 次年度への課題・改善方策

- ・中高一貫の学びの充実を目指し、授業改善も踏まえた観点別評価の適正な実施を進めることで、定期考査の見直しなど、より充実した学習活動を展開していく。
- ・SSHの研究開発の成果やICTの先導的取組を日頃の学習集活動に融合した新たな学びのスタイルを明確に打ち出す。
- ・本校の強みを地域をはじめ、より多くの方々へ周知するため、広報や情報発信内容及び発信方法に工夫を行う。
- ・生徒が自ら活動する時間を確保するために、日課、教育課程、課題、考査、通学手段などについて抜本的に見直しを行い、生徒が主体的に学ぶ学校にする。